



筆者の茶園。前年までナガチャコガネの害に遭った畑だが、みごとに一番茶が出た



近所の通常栽培の茶園。前年までこんな感じだった

三年前のこと、スーパーERという微生物酵素資材を七年間使っている方の茶園では、「ナガチャコガネの被害が出ていない」と聞き、私も使うようになりました。この資材は数十種の植物を原料に、昭和二十年代から共棲培養されてきた土壌改良材です。殺虫剤でも、忌避剤でもありません。強い力を持った微生物を土壌に灌水することで、土の団粒化を促し、根張りをよくする目的で使用しますが、結果的にナガチャコガネの害がなくなるようなのです。



筆者。仲間と一緒にスーパーERをかん水中

酵素資材散布で被害ゼロ

微生物リッチな茶園からは姿を消した

静岡・寺尾 正

一番茶の芽が出ない
ナガチャコガネの被害が出るようになったのは、二〇年くらい前からです。小さなコガネムシですが、土中で越冬した幼虫が春先に出てきた根の先端を食べるので、一番茶の新芽が出ずに大きな被害となります。被害のひどい場所とそうでない場所とがありましたが、かつては八haの茶園すべてにナガチャコガネが生息し、反当七〇〇kg採れていた茶園が一〇〇〜二〇〇kgへと大減収することもあったほどです。当初は、秋にスミチオン（有機リン系）を一〇〇〇倍で反当二〜三ほど散



お茶のナガチャコガネ対策



以前、私はお茶の収穫時期になると十二指腸潰瘍や胃潰瘍、結膜炎などに悩まされていましたが、六〇種類の薬草とロイヤルゼリーで抽出した酵素液を手作りしている方と出会い、それをコップに薄めて飲んで復調した経験があります。医者がビツクリするほどの効果でした。酵素には不思議なパワーがあると感じていたのも、この資材を使ってみた理由の一つです。

農薬代が大幅に減る

初年度は、一番茶摘採後に一〇〇〇倍に薄めたスーパーERを反当五〇〇kg散布します。ウネ間から株元にかけて土の上に丁寧にかけると感じます。その後一〇〇〇倍液を三〇〇kgずつ、二番茶後の七月末、秋冬一番茶前の九月、一番茶前の三月と四月にかけていきます。二年目からは作業にあわせて、年間三〜四回の散布とします。それ

ではほとんど悩まされていたナガチャコガネが出なくなり、収量は回復したのです。理由はよくわかりませんが、放線菌をはじめとした土壌中の微生物が活発に活動し、ナガチャコガネが棲みにくい環境がつけられているのではないかと考えます。二年ほど続ければ、茶園からほとんど姿を消してしまします。

微生物を死滅させないよう、それまで年間五回ほど散布していた殺菌剤は一切やめて、殺菌剤も夏場のスリップスやウンカ（チャノミドリヒメヨコバイ）、秋のチャハマキ対策として三〜四回散布するのみとなりました。ナガチャコガネだけでなく、クワシロカイガラムシも来なくなったので、一反で一万円ほどするブルート（ピロプロキシフェン）の



スーパーERのボトル。微生物が呼吸できるように、キャップに空気穴が開いている（倒しても液体は漏れない構造）。（問い合わせ先：謝サルート TEL054-643-3488、250ml 4000円より販売）



月刊誌「現代農業」6月号

情報提供：

静岡県牧之原市在住 T様 (64848)

からの変化としては、微生物の活動で地温が一〜二度上がったことが挙げられます。そのため、収穫時期が三〜四日早まりました。牧之原の場合、四月二十日過ぎから収穫が始まり、生葉1kgで一〇〇〇円ほどの相場が日に日に下落し、二週間後には1kg二〇〇円といった価格になります。早期にどれだけ収穫できるかは収益に大きく影響するのです。そのうえ、収穫初日や二日目の収量も反当三〇〇kg程度だったのが四〇〇kgとれるようになったり、チソッ・アミノ酸含有量が上がったたりするなど、

さまざまな面で好ましい変化が起こりました。近所の農家もナガチャコガネに悩まされていた時期の圃場を知っているのですが、その変化にビツクリしています。「それじゃ、オレも全面的にやってみる」と四町歩の畑すべてで試したところ、みごとにナガチャコガネの害がなくなりました。また、上位葉だけでなく下位葉も軟らかい葉となることにも驚いています。

現在、私の周りでは三〇人ほどの仲間が使い始めており、化成肥料を使った慣行栽培から、微生物のエサとなるような有機肥料を使った栽培への切り替えも進めています。

今、静岡のお茶農家は大変な時期を迎えています。農薬や肥料代などの資材が高騰し、お茶離れとともに相場が下落し、高齢化も待ったなしで「年金をつぎ込まないと茶園を維持できない」というのが産地の現状です。経費が減り、体もラクになるこの方法が普及し、茶農家が一年でも二年でも長く茶園を維持できるよう、今後とも研究を続けていきたいと思っています。

（静岡農教之原市）